

会員投稿

駒音高く(1)

太田市 白井 敬郎

若い頃より将棋に親しみ50年、今も脳裏に浮かぶ光景がある。

昭和25年の夏、大阪梅田の繁華街で偶然見かけた将棋クラブ。外から中を見守る人垣がある。そこは2畳の指導対局席。初めて見る高級5寸盤、盛上駒、和服姿の初老のプロ棋士が、中年客相手に指導中であった。私も局面に惹き付けられ、時間の経過も忘れ観戦した。プロ棋士との接点、本格将棋との出会いである。

昭和22年、香川県から三菱電機伊丹製作所に入社。同期70人程との寮生活が始まる。四国、山陰、兵庫県北部出身者で、各地の方言が飛びかう賑やかな毎日。戦後の食糧難の時代、夜になると各部屋で電熱器で飯を炊く。待ち時間に将棋が始まり、仲間が集まる。助言、待った、なんでも有りで、研究会のようになり、皆で楽しむのであった。

伊丹の将棋同好会に入り、先輩の指導を受ける。駒を並べ終ると、先輩がだまって大駒二枚（飛と角）を脇に置く。寮では強かったので、二枚落ちなら負けるはずがないと力むが勝てないのである。定跡を知らない、急所がわからない、力だけでは通用しない。アマ2段の実力を知る。局後に先輩から「筋(けい)が良い。10年も熱心にやれば平手(対等)になる」。この一言が将棋に夢中になるきっかけとなった。

先輩に誘われ、伊丹商店街の将棋会に通い出す。商店の主人が多く、午後7時から始まる。腕自慢の強者ぞろい、容赦なく鍛えられ上達していく。寒さに震えながら終電車で帰る日も多くなる。いまでは懐かしい思い出となっている。

前述の梅田将棋クラブとの出会いはその頃である。休日を待ちかね梅田に行く。料金を払いクラブに入る。目的はプロ将棋の観戦、指導席は順次切れ目がない。常連客、有段者が多い。定跡、手筋をおぼえる。次の一手を考える。局後の解説を聞く。やがて自分でプロの感触を得たい、実力を試したい気持ちになり指導を受け出す。大駒一枚落ちで教わる。本でも研究した定跡型に進むのであるが、上手の柔軟な受けで局面が紛れ、勝負どころで間違える。急所を突く鋭さ、終盤力の差であるが、なによりも将棋の感覚、大局観が異質であった。たまには勝つことがあり（緩めてもらったのかもしれない）一局ごとに強くなる気がした。

先生の指導は、客の棋力、性格により、どのようにでも指示決して痛めつけない。接戦のようで、一手勝っている。客は残念がり、また来る気になる。

アマ3段の棋力になり、先輩を追い越す。18歳からの2年間である。Y先輩、N7段との出会いにより、基礎から本質の将棋を学べたことを感謝している。この時期に私の将棋が構成され、現在の棋力がついたと思っている。(つづく)



会員投稿

駒音高く(2)

太田市 白井 敬郎

やがて仕事が忙しくなる。囲碁、マージャンを覚える。ギャンブルを始める。趣味、娯楽の多様化。そして将棋クラブがパチンコ店に変わる。時代の流れ、環境の変化により、将棋から少し遠ざかるのであった。

昭和41年、馬電に転勤が決まる。これを機に趣味は将棋、囲碁だけにする。ギャンブルは卒業と決め、実行した。

群馬での新しい棋友との交流が始まる。趣味の友は楽しくありがたいものである。土地の風習、社会を学び、生活行動が広がる。「趣味は人生を豊かにする」とは定年後実感している昨今である。

群馬県には日本将棋連盟の支部20。会員800名を越す将棋の盛んなところだ。太田支部は会員130名の県内一大所帯。新聞社、連盟主催の各種アマ棋戦、地区予選、市民大会、文化祭など、年間8回ほどの将棋大会の開催。他支部との交流、会員相互の親睦会などの活動を行っている。

私も副支部長の立場で、会の運営、将棋大会のお世話、後進の育成など、お役に立てばと思っている。今年はシニア県大会で優勝し、目標であった3連覇を達成。そして京都での全国大会で3位に入賞した。さらに次の目標に向かって頑張りたいと思う。

さてプロの将棋界に目を向け、時代の流れを書いてみたいと思う。

すべての棋士のあこがれの名人位。慶長年間の第一世名人大橋宗桂以来、300年の歴史を持つが、昭和10年、家元一代制から実力制に変わった。

実力名人木村義雄(8期)は戦前無敵の強さ。打倒木村そして名人位箱根越えは関西棋界の悲願であった。やがて関西期待の升田幸三、大山康晴の台頭により、戦後将棋の幕が開く。升田は戦後南方から幅員、次々と新戦法を編み出し、将棋戦術に革命的な変革をもたらした。将棋ファンの熱烈な応援を受けた人気棋士だった。

戦後名人位獲得棋士9人。通算5期以上獲得すれば、引退後世代名人を名乗る制度である。

大山15世名人(18期)、中原誠(15期)、谷川浩司(5期)の3人であり、一時代を制覇した棋士である。

(つづく)



会員投稿

駒音高く(3)

太田市 白井敬郎

将棋界の制度を見ると、プロ四段からが棋士と呼ばれ（対局料がもらえる）、C組2組に編入され、A組八段まで5段階あり、順位戦を戦う。名人戦のみA組10人で挑戦者を決める。他のタイトル戦は四段でも勝ち上がれば、タイトルを取れる。順位戦参加120人の中ほかに、フリークラス、女流棋士がある。

昭和60年代に入り、将棋界を揺るがす子供旋風が吹く。羽生善治、佐藤康光、森内俊之、村山聖らの10代棋士が、タイトル保持者、歴代名人を次々と破っていく。彼らはチャイルド・ブランド（超新人類）と呼ばれた。テレビ将棋対局で歴代名人が新四段に負ける。面白は潰される、おじさま棋士は「子供とだけはやりたくない」心境だという。

羽生は棋士になり、毎年昇段の勢いでA級に入り、その年挑戦者になり、名人位を獲得する。平成8年2月、谷川王将からタイトルを取り七冠王を達成、全タイトル独占は永遠不滅の記録といわれている。

将棋ファンで歌人の、俵万智さんは「紙ひとつ、否、神ひとつ、それゆえに負けぬ男を羽生と呼ぶなり」とその偉業をたたえた。

昭和の棋士と平成の棋士とでは、将棋に対する考え方、姿勢に大きな違いがあるといわれている。50歳名人誕生で、時の人となった米長九段は、将棋は「全人間的勝負」と考え、人間的修業や人生経験が勝負に大きな影響を持つとする。

羽生は将棋と人生は別、将棋を「頭脳スポーツ」とみる。盤上のみに勝負はあると考える。盤上での読み、研究、大局観だけが勝負を決するというのだ。昭和と平成の相異なる主義と思想の戦い。時代の流れとはいえ、少しあざわらしさがある。

今年、気になる棋士が2人いる。A級順位戦5勝4敗で、不運にも降級（B組一組）になり、フリークラス転出を決めた米長九段。林葉直子との不倫問題でダメージを受けた中原永世十段。どちらも昭和を代表する棋士、今年の将棋内容と動向が注目される。

谷川、羽生を軸に棋界は動いていく。二人の秘術を尽くした名勝負を待ち望んでいる。
(おわり)

(本欄への投稿をお待ちします。自薦、他薦を問わず
希望者は事務局までご連絡下さい。…編集委員会…)

